

「おかげさま」に支えられた一年でした

上 廣 哲 治
うえ ひろ てつ じ

会長職の重責を担わせていただくようになって一年がたちました。今、心から申し上げたいのは、「おかげさま」の一言に尽きることです。

この一年の間、一人でも多くの会友の皆さまにお目にかかりたいと、機会をとらえて全国各地の朝起会に出席させていただきました。そこには実践の喜びや充実もあれば悩みや苦しみもありました。ただ共通しているのは、実践へのひたむきな情熱です。私はそこから多くのことを学ばせていただきました。そのひたむきな情熱に支えられて、「おかげさま」で会長としての一年を過ごすことができたのです。

「おかげさま」の「おかげ」は、もともと神仏の助けや加護を指し、そこから転じて、人に受けた恩恵や力添えを含む言葉となりました。それに「さま」をつけて、人々の行為に対する感謝の気持ちを表現したといわれます。かつての「倫風宏話」で名誉会長は、「おかげ」にはプラスの要素とマイナスの要素があり、実は、マイナスの要素からも多くの恩恵を受けていると述べております。プラスの要素というのは、直接その人を支える役に立つものです。一方で、その人を苦しめたり苦境に陥れたりするようなマイナスの要素もあります。しかし、それがその時はマイナスであっても、結果的には役に立っている

るといのです。

私は最初の「宏話」で、「会長としての私の役目は、名誉会長がこれまで説かれてきた教え、『実践倫理の教え』を、これまで以上に実践に結び付けていくことです」と申しました。教えは、それが生活の中で実践されてはじめてその力を発揮し、私たちを仕合わせへと導いてくれるのです。なにが教えを實踐につながる契機となるのか、それを知ることが極めて重要です。

その答えを求めて、各地の朝起会に出席させていただきました。そして、マイナスの要素が、私たちを實踐に導くきっかけになっていることに気づいたのです。

朝起会では、さまざまな境遇を生き貫いておられる方々が、出席者の前で、今日一日、教えを實踐して明るく元気に生きる決意を演説されます。出席者に自分の決意を聴いていただき、その決意の証人となつてもらおう。聴いていただくことで、ともしれば挫けそうになる自分の心に枷をかける。お互いがそれを實踐への力とする。そうした支え合いを目的にすることができました。

演説の中で、ある母親は、二男の世話に追われて、長男を蔑ろにしたことを反省し、わが会の「長幼の序」の教えを實踐すると決意されました。その母親によれば、二男が生まれてからというもの、長男はことごとく反抗し、言うことを聞かなくなりました。育児や家事に追われて多忙のあまり思わず長男を厳しく叱りつけてしまったそうです。しかし、よく考えてみれば、長男は自分にも関心を向けてほしいと訴えているのだと気づいたのです。「長幼の序」という教えは、兄弟姉妹の年齢順に一定の年齢に達するまでは、先に産まれた子どもに気を配るという教えです。長男長女は愛に満たされていれば心に余裕ができ、自ら進んで年下の子どもに面倒をみるようになります。先の母親は、長男が反抗的になつ

た原因は自分にあると気づき、教えを実践して長男にも十分愛情を注ごうと決意したのでした。

後から聞いた話では、会の教えの通り、長男は聞き分けがよくなったといえます。さらに弟の面倒をみるようにもなったそうです。

母親はマイナスの事態に正面から向き合うことで、自分の足らざる部分に気づき、教えを実践することで苦境を乗り越え、仕合わせへの道を歩み始めたのです。母親が自らの過ちに気づけたのは、反抗して言うことを聞かない長男の「おかげ」といえるでしょう。

仏教に「煩惱即菩提」という言葉があるそうです。「煩惱」は、心身を煩わせ悩ませる欲望や怒りなどのマイナスの感情です。それが「菩提」、つまり逆境や困難に向き合い、それを正しく認識することこそが仕合わせへの近道であるということになるでしょう。演説に耳を傾けていると、そこには大小の違いはあっても、その話のどこかにマイナスの要素が含まれています。それでも明るく清々しいのは、人生をより善く生きたい、家族を仕合わせにしたいという思いに支えられ、実践によってマイナスを乗り越える見通しが立っているからです。教えを実践につなげるもの、それは人生をより善く生きたいという気持ちや熱意であり、家族の仕合わせを願うやさしい思いです。そこから、逆境があるがままに受け容れて正しく認識し、苦境こそ仕合わせに至る入り口であるとする態度、すなわち「現実大肯定」と「苦難福門」の姿勢が生まれます。

多くの朝起会に出席して改めて本会の教えの深さ、広がりやを学ばせていただいた思いがいたします。「万象わが師」、すべての物事が師となると実感いたしました。会長は常に、道を示しつつけることで、会友を導く立場ですが、会長もまた、会友の実践に寄せる思いに導かれています。会長と会友は、このように互いを補完する形で支え合っているのです。

「おかげさま」と言い合う関係の根底には、目に見えない大いなる支え合いの力が潜んでいます。一人ひとり、その支え合いの力によって生かされている。と同時に大きな支え合いの力を生み出しているのです。

「朝の誓」ではまず、「今日一日 三つの恩を忘れず 喜んで進んではたります」と唱えます。「三つの恩」とは、言うまでもなく「親の恩」「師の恩」「社会の恩」です。これら三つの恩のおかげさまで、私たちは生かされている、そのことを忘れてはならない。生かされているという事実を胸に刻み、喜んで進んではたらくことで、私たち自身も大いなる支え合いの力になると誓っているわけです。今、自分に与えられた務めを、喜びとともに果たすことが、他の人々を支える力になる。それが、どのようにして支える力になるのか、その仕組みはわかりません。わかるのは、大自然の摂理から見れば、私たちが生かされているように、私たちのほたらきが他の人々を生かす力になりうるということです。

さて今月の実践課題です。私たちは大いなる支え合いに生かされていると感謝することはあっても、身近にいる人、ただそこにくれるだけで仕合わせを与えてくれる人——父や母、夫や妻、子どもたちに感謝することを忘れがちです。まず大切にしたい人の存在や、家族がしてくれたことに感謝する実践から始めましょう。それによって、「おかげさま」の言葉と心を、日常生活に復活させるのです。

最後になりましたが、この一年の皆さまのご助力、ご協力すべてに心からの感謝を申し上げます。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。